

が、兵役も勤務先も内地だったため、一家のなかでは一番運が良かった。ただ、戦後の食料難時代に満州から引き揚げてきた母、弟妹たちの面倒をみることになつて、大変な苦勞をしたと思う。

引揚げ後、残念だったのは次兄の戦死を知らされたこと。大連で苦勞をとにした三兄が、大連での無理がたたつて病気が再発し、引揚げ後まもなく死亡。弟も昭和四十年ごろ病魔におかされ入退院を繰り返して死亡。母はこれから楽になるという矢先に交通事故で死亡、七十四歳だった。結局、一人で人並みの人生を送ることができたのは、長兄と姉と私の三人だけだった。兄は平成六年に死亡。姉は自身が身体障害者の身でありながら、横浜、大和両市で社会福祉事業に従事し、平成七年に、兄の後を追うように他界した。我が家で旅順のことを知っているものは私一人になってしまった。

興亜の志に燃えて、大陸で技術者の道を歩もうとした私の夢は戦争で大きく狂わされたが、引揚げ数年後、大手石油会社に職を得て定年まで勤め、現在は横

浜市郊外で、老妻と二人で精神的に最も安定した毎日
を過ごしている。

愚直の青春、二、一二八日間

神奈川県 小川之夫

大正生まれの私は、毎年八月十五日の終戦記念日が近づくと、なぜか心気が高揚してならない。まして昭和六十二年の六月に、私の青春そのものであった、我が母校『哈爾浜学院史』が刊行されてから、なおさらその感が強くなった。

この『哈爾浜学院史』をむさぼるように読んでいたある日のこと、妻が、亡父の遺品の中から古びた紙包みを持ち出してきた。

それは昭和十九年四月、哈爾浜学院に入学するため関釜連絡船に乗り、下関から釜山に向かい、それから哈爾浜で入隊するまでの間に、両親あてに私が出した手紙七十三通と、シベリア抑留時代の往復通信などの

束であった。

当時の横浜は戦火にさらされており、その中にあって、横浜から岐阜の田舎に疎開させ、そして戦後再び横浜に戻ったのである。よくぞ今日まで残っていたものと、父母に対し感謝するばかりである。私は、これを読んで胸の締め付けられるような思いに浸った。私の青春記そのものである。そして、あの八月十五日を境にしてのハルビン、シベリアの思い出がほとばしり、心気の高ぶりをおさえることができなくなった。

私は、大正十五年四月に岐阜県の山村に生を受けたが、すぐに横浜市に移り、それからずっと横浜で育ち、昭和十四年四月には横浜市立横浜商業学校に入学した。その間、家庭的にはいろいろな変化があったが、何ら疑問を持つことなく順調に成長していった。昭和十八年十二月には、横浜商業学校を繰り上げ卒業し、昭和十九年の一月に東京の慶応大学医学部で行われた、ハルビン学院の入学試験に臨んだ。当時のハルビン学院の入学試験の方法は、原則的には各道府県からは一人のみ選抜するという大変な難関であったので、

ほとんどあきらめていた。しかし、運良く神奈川県から一人の合格者となり入学許可を受けた。

昭和十九年四月三日、一人として知っている者もない未知の大陸に向かって、夢と希望と期待に胸を膨らませて横浜を離れた。十七歳だった。小学校六年生の修学旅行で伊勢神宮と京都に旅した以外、家族と離れて一昼夜を越す汽車の旅は初めての経験であった。幸いに車中には、東京から入学する吉山君と宮内君の二人がいたので、心強くなりたちまちのうちに意気投合した。

四月四日の朝九時出航の関釜連絡船に乗船するため待合室に入り、その堅い木のベンチに座って父あてに葉書を書いた。

未知の大陸への夢と期待で胸がいっぱいになり、しばしのまどろみもできなかった。

四日の夜、釜山駅からハルビン行きの特急ひかりに乗車して一路ハルビンに向かった。この線路は広軌道なので内地のような狭軌道の鉄道と違い客車の幅も広く、揺れも小さくて、とても乗り心地のよい列車だった。

沿線の風景は、内地と趣を異にしていた。一面の赤土でなだらかな曲線を描いていたし、田はよく起こされて内地よりも区画が大きいようであった。家並みも鈍重な感じのする黄色い壁土の平屋が目についた。空はくっきりと晴れてポプラが空を掃くかと思うばかりに突き立ち平和のものであった。

哈爾濱までの間に、京城、奉天、そして新京にそれぞれ一時停車するので、下車してあちらこちら見学した。

奉天では、悪臭に少なからず面食らった。満人街も歩いたが、まだ行政区画もできあがっていないので雑然とした感じだった。これが大満州国の奉天かと思ひあきれたことだった。赤土の道路は所々にアスファルトがあつて、風が吹くともうもうたる土煙が舞い上がっていた。

奉天でも日本食を食べるには外食券が必要になっていて、警察署にもらいに行くと、もう取り扱いはしていないとのことで困っていると、署長が心配して、関係先に連絡を取り三日分を手に入れてもらった。これ

で奉天に一泊することができた。

父に、この署長への礼状を頼んだ。

京城から奉天に向かう途中で、国境の町安東駅に着いたときのこと。満州側の日系税関吏が、密輸検査のため乗車してきた。乗客は各自の座席で座って待つていと、二人の税関吏が乗客の態度に注意を払いながら通路を歩いてきた。人を射るような鋭い日つきだ。目を合わせたとき、何も後ろめたいところがないにもかかわらず、一瞬ドキッとしたくらいだった。我々の

後ろで突然、税関吏の一人が、中年の朝鮮婦人に猛烈なびんたを加え、もう一人の税関吏が彼女の襟首をつかんで立たせるや否や、スカートの内側に縫い込んであった白い袋状のものを引きはがした。大声をあげて泣き叫び続ける女を引きずり降ろして、ブラットホームを足早に引つ立てて行ったが、初めての経験に息をのんだ。満州での第一印象は強烈であった。

こんな暗い話は手紙には書けなかった。

四月十日朝、やっと哈爾濱駅頭に降り立った。例年になく今年は暖かいとのことで、外套のみでもさほど

寒いとも感じなかった。駅前にも街路樹があつて、こぢんまりとした住みよさそうな所という印象だった。

すぐに馬車で馬家溝にある北寮に行った。石畳を走る馬のひづめの音とともに、中央寺院付近の榆の並木に異国に來たことに感無量であつた。

北寮は、学院とちよつと離れていたが、きれいなれんが造りで窓も出入口もみんな二重になっていて、朝晩はスチームが通つていた。部屋は九〜十人で、二年生が室長であり、きれいで設備もよかつた。私は一号室になつた。その様子を手紙に書いた。

昭和十九年四月十五日、待望の入学式があり、一年甲、B組となり、佐山助教授、ベルコフ講師が担任となる。

寮での生活は、朝は非常に忙しい日課であつたが、気持ちのよいものであつた。

寮生活が軍隊式ならば、学習の時間表もすさまじいもので、今までに経験したことのないような猛烈な授業であつた。つい弱音を吐きたくなるがあつたが、家には頑張っていることを強調した便りを出して

いた。五月末までに十二通を出した。

六月一日から向こう二カ月間の滑空（グライダー）訓練が始まつた。この訓練は一年生全員と二、三年生の若干名が参加した。朝五時から七時までと、九時から十二時まで、三時から七時までの計九時間を連日行うもので、相当にきつい訓練である。内地でいうところの勤労働員で、二カ月間どこかに入所するのと同じである。何しろ激しい訓練なので腹もへるが、そのころはまだまだ十分に配給があつた。

ちよつと軍隊に入ったようなもので、起床ベルで全員ゲートル姿になり十五分で夜具も畳んで寮庭に集合し、それから練習場に向かう。私たちの足で三十分から四十分は確実にかかる距離で、五時には練習開始である。四時といえばまだ夜は明けず、練習場についたころ地平線のかなたから真っ赤な太陽が昇ってくる。七時まで、体がくたくたになつて声が出なくなるまで早朝訓練があつた。

朝食に戻つて、八時三十分から今度は午前中訓練となり十一時半ごろまで続く。このころになると真夏の

午後のような太陽で、よく「午後じゃないか？」と錯覚に襲われた。滑空訓練はだらしなくやっていたのは決して効果なく、進歩もない。あるのはただ事故と危険だけである。

十二時から午後三時までには午睡の時間だが、昼食の時間も練習場に行く移動の時間も入るので、実質にまどろむ時間は、一時間から一時間半ぐらいであった。午後三時から六時まで午後の訓練をする。六時半に機材を撤収し寮まで歩いて帰り夕食を食べて風呂に入ると、もう何をすれば元気もない。もちろん本を開く元気も出ないのにはほとほと困った。

外出も日曜の午後に五時間ほどで、そのときに一週間分のエネルギーを蓄えるのである。

四十日間約三百時間の猛訓練で、中級機まで進み、三級滑空士の資格を取得して七月三十一日に訓練を終了した。

八月一日から五日までの短い夏休みに、新京郊外にある広島県出身の集団である五常開拓団に同期生二十五人と共に勤勞奉仕に行った。背丈以上もあるトウモ

ロコシと高粱の収穫が仕事であったが、そのちょうど一年後にはソ連軍の侵入があり、攻撃から身を守るため、老幼婦女子があのような茂みの中に逃げ込んだことだろう。草いきれで息が詰まるほどだったが、一年後のあの悲劇のことを想像することはできなかった。哈爾浜ではもう食べられなかった真っ白いご飯を腹いっぱい食べることができたし、野菜もおいしくたくさん食べた。

八月五日の夜、開拓団の小学校の講堂で歓送会を開いてくれたが、その夜の印象は今でも強烈に残っている。「大陸の花嫁」として集団で渡満してきた若い女性数人が、急造の舞台の上でレコードに合わせて浴衣姿で「真白き富士の気高さを……」や「誰か故郷を思わざる……」などの新舞踊を踊ってくれたときのかれんさは忘れられない。あの人たちはどうなったのだろうか？

敗戦後のあの苦難な状況下で、無事に帰国できたのだろうかと気にかかっていたが、後日知ったことだが、五常街の開拓団十六団約六千人は、敗戦後一年間で三

分の方が亡くなったという。心から冥福を祈るものである。

五常開拓団で短い夏休みを奉仕作業で過ごしたと、冬休みには帰郷できるかもしれないことなどを手紙に書いた。もう三十信近くなった。

秋が深まってくるころになると、来年にせまってきた徴兵検査の準備に思いが移っていった。

昭和二十年の正月は、休暇が一週間しかなかったので家に帰ることができずに、親元を離れて初めての正月は、哈爾濱で過ごすことになった。新年のあいさつと、二十歳を迎えての覚悟などを書き写真を同封して両親に出したが、その返事に父親が年をとったということがあり、満州の学校に入ったことが親不孝ではなかったかと自省したことを思い出す。

二十歳になり、いろいろな思いが胸に迫って、両親の慈愛を今更のようにしみじみと感じていたが、その反面、徴兵検査を控えて、大君の御盾として出でたつ春、という覚悟にも浸っていた。

二月二十五日に哈爾濱の地段街にある桃山小学校で

徴兵検査を受けたが、視力が弱かったので乙種合格となり、男子一生の名誉と感激していた。

三月二十八日に現役兵証書を交付され、兵種は歩兵であった。五月十六日に入営命令書を受けて、二十一日、黒河近くの山神府に駐屯する第八四部隊に、学院生五人と一緒に入隊した。

六月上旬、我が生涯において初めて最後の軍事郵便を両親に出した。第七十四信となる。これを最後に、昭和二十三年三月十日付の「捕虜通信」までの約三年間、家族からみれば生死不明の状態となった。

山神府は、起伏のある大草原の中に作られた軍隊だけの基地であった。関東軍の猛烈な訓練が始まった。内務班には「私的制裁禁止」の貼り紙が何枚も貼られていたが、私的制裁ではない「公的制裁」として横行していた。

訓練は、二、三人が全力で押す輜重車を戦車に見立てて、遺骨箱と呼ばれる急造爆雷を抱きかかえて、その車の下に飛び込む訓練であった。七月になると、在満根こそぎ動員で兵員数が三倍に増えた。

二個連隊約一万人が、完全武装で齊々哈爾まで行軍した。軍隊の引越である。小興安嶺を越えて約二十五日間の行軍と野營の連続であった。ニコウキスゲが一面に咲き誇っていたことを思い出す。小休止のとき背のうを肩からおろすと、もう再び背中に負うことができなくなるほど疲れていたの、背中に負ったままあおむけに寝転がった。見上げる北滿の空はあくまでも青かった。

齊々哈爾に到着し、第四十九師団挺進大隊に編成替えになったが、八月九日、ソ連軍の全面侵攻が始まった。

挺進大隊は哈爾濱警備の命令を受けて、その日の夕方に無蓋車で哈爾濱に向かった。夜半から強い雨に見舞われ、全身ずぶ濡れになって哈爾濱に着いた。八月中旬とはいえ北滿の朝は寒く、ぶるぶる震えながら宿舍の学院南寮の隣にある富士高女の教室に入った。机の無い教室は異様な感じがした。

八月十二日、中隊長命令により公用腕章を着けて伝令のため富士高女の校門を出たところで、渋谷三郎院

長の乗った馬車に出会った。とっさに敬礼をしたところ馬車が目の前で止まった。

「小川か、元気でいるか。学院のことは心配することはない。私は急用で急ぐが、見れば公用腕章だからすぐに馬車を帰すから、自由に使え」と言われた。名前を呼ばれ、馬車まで貸すというお言葉に感激し、コチコチに緊張し、馬車を辞退するのがやっとだった。

渋谷院長の思い出はこうして強烈に焼きついたが、ソ連軍の哈爾濱進駐の前に、家族共々に覚悟の自決をされた。思えばそのときの渋谷院長が見納めであった。

哈爾濱の極楽寺の近くにある露人墓地でソ連軍の戦車待ちを受けて、急造爆雷を抱いて飛び込めという命令を受けた。

八月十五日止午、露人墓地に散開する前に極楽寺前に整列させられた。ガーガー、ピーピーとラジオがなっていたが、我々兵隊には何のことかさっぱり分からない。かすかな音声がとぎれとぎれに聞こえてくる。さざ波の如く周囲から「停戦だ！」と伝わってきた。間もなく銃声が散発的に遠く近く聞こえてきた。「満

軍の反乱だ！」と兵隊たちは騒いでいた。哈爾浜の郊外の数カ所から黒煙が上っているのを望見した。緊張感がとれ、空虚な夏の暑い午後となった。

応召兵や古年兵はそここに集まって何やらさざやいていたが、初年兵は相変わらず雑用の使役にこき使われていて、瞬く間に四、五日が過ぎていった。

数日後、哈爾浜競馬場まで武装した関東軍として最後の行軍を行った。五月末入隊以来、手入れだけで一発の弾も撃ったことのなかった三八式歩兵銃を一カ所に積み上げた。

朝鮮半島経由の復員は大変混乱しているので、牡丹江経由ウラジオストークから船で復員するといううわさが流れた。ソ連兵のうちそは天才的で、関東軍の猛者も何ら疑うことなく哈爾浜で無蓋車に乗せられ、結果的にはほとんど全員シベリア送りとなったのだ。

二、三日かかって黄道河子まで送られ、そこからは鉄道が破壊されているということで徒步行軍となった。土ぼこりの立ち舞う八月下旬の夏の日盛りの中を、帯革のみの隊伍なき行列が海林に向かって進ん

だ。師団か連隊司令部か分からないが、高級将校の集団も丸腰のまま歩いてきた。一般邦人の婦女子も「兵隊さん連れてってください！」と、隊列の中に入ってきた。

もう軍隊の整然とした隊列でなく、敗戦のショックは旬日にして烏合の集まりとなっていたが、一般残留邦人に見れば、兵隊さんと一緒という安心感があつたのであろうか、肝心の兵隊はもう栄えある関東軍の精鋭ではなかった。

小高い場所に若い女性が一人、はぐれ鳥のように腰を下ろし、両膝を両手で抱え込み、視点の定まらない眼で隊列を見下ろしていたのが大変に印象的であった。彼女に何があつたのか知らないが、どうなったのであろうか心残りだった。

ソ連兵が数人、隊列の周りを前後しながらついてきた。所々で鼻を突く悪臭が漂ってきた。道路際に放置された軍馬の腐乱死体だった。更に行くと、小さい溝の中には日本兵の死体も転がっている。なぜか軍袴も脱がされており全裸だった。葬られることもなく、葬

る気力もなかった。隊列は声を上げる者もなく、ただ下を向いて歩いているだけだった。精強関東軍は、こんなにももろかったのであろうか。

八月下旬でも日中の日差しは強かった。ソ連兵は何の意図を持ってか、四、五十人ずつの集団に水浴びを強要した。いかに坊主頭にし、胸にさらしを巻いて軍服を着ていても、これだけはどうしようもなかった。

女性を探し出すには有効な手段であった。

九月一日、海林収容所に着いた。鉄条網で周囲を囲っただけの野営地であった。小隊単位で携帯天幕をつぎ合わせて屋根をつくり、その下の地面に、夏の衣袴のまま横になるだけだった。携行してきた米も底をつき、馬糧用の未精米の高梁になった。地面からの湿気と食べ慣れない高梁の消化不良から便秘と下痢を繰り返した。血便の者も多くなり体力が急速に低下した。

一選抜の一等兵になって、大隊指揮班に移った。

ソ連兵も食料に困ってきたのか、ある日、開拓団出身の兵隊と私を選ばれて、ソ連兵二人と一緒に朝鮮人部落に食糧の徴発に行かされた。出入口でなく鉄条網

を壊してあったところから一気に走り出した。遠くの見張り所の警備兵が、自動小銃で我々を狙って撃ったが幸いにも当たらなかった。荷車にへばりついたまま馬は飛び走った。この警備兵は、他の警備兵には連絡をせず、独断専行したらしかった。ある部落に入り、ソ連兵が威嚇射撃をした。長老らしき者が驚いて出てきた。

幸か不幸か、朝鮮人部落だったので満語の必要はなく日本語で話ができた。私は、両者を離反させるように仕向けた話をした。朝鮮人の長老には日本語で、ソ連兵にはロシア語で両者の話を通訳した。ソ連兵は、部落の家々に入って暴れ回った。私は、長老の前ではソ連兵をなだめているように取り繕い、ソ連兵にはけしかける言葉を言った。結局、六十キログラムぐらいの米袋一袋半を略奪してきたが、朝鮮人長老は私の努力を多としたのか、鶏をつぶし白米のご飯を炊いて供応してくれた。帰りには、ソ連兵に交渉し四等分の分け前を主張した。腹のうちでは無くてもともとと思っていたが、小さい方の米袋をくれたので大成功であっ

た。

収容所に帰り、その戦果を大隊長に差し出し経過報告をした。大隊長も大喜びで病人食に回すよう指示していた。私たちには雑のういっばいの褒美をくれたが、指揮班で食べたらい回で終わってしまった。

帰国させる（これはソ連の謀略だった）ということ
で勇躍して歩き出した海林から牡丹江への行程は、
ワイ（略奪）の一番激しかった道程だった。戦車兵と
思われるソ連兵が、昼夜の別なくピストルと自動小銃
で威嚇しながら我々の隊列に割り込んでくる。時計、
万年筆、図のうなど手当たり次第に略奪していった。
両腕に何個も時計をはめていた。我々は兵隊とはいえ
武装解除されており、彼らは武器を持っているので完
全に強盗集団である。私は、「すぐ私と一緒に来てく
ださい、強盗がいます」とロシア語で一枚一枚手書き
して千枚作り、大隊の全員に携帯させた。略奪の危険
が迫ったときに、その紙を持って護送兵のもとに走ら
せた。護送兵は、本気で自動小銃を空に向けて撃ちな
がらとんできた。このことで、ソ連軍少将に呼び出さ

れて、ソ連軍の軍規維持に貢献したとして感謝され
た。

牡丹江の郊外で数日野宿をしたときのこと、牡丹江
河の橋の上で、満人がマクワ瓜や大福餅を売ってい
た。兵隊たちがなげ無しの金を出してそれを買って
いたとき、数人のソ連兵がその金をわしづかみにし
て逃げ出した。とっさに私は、足払いを掛けソ連兵を
倒した。そばにいた数人の日本兵も加勢して二、三人
を投げ飛ばした。驚いたソ連兵は銃を振りかざして反
抗してきた。結局、首謀者として捕まってしまい、銃
殺ということになり、近くの畑の中に引っ張り込まれ
た。しばらく歩かされたとき、ソ連兵が「逃げろ！」
と叫んだ。もしも、その声で逃げ出していたら背中か
ら撃たれていたであろう。逃亡したから射殺したとい
う大義名分を与えてしまうだろう。私はその手に乗る
ことなく、向かい合って口論した。日本人がロシア語
で話したので、ソ連兵はびっくりして銃を空に向けて
威嚇射撃をしていた。そのうちに馬に乗ったソ連内務
省軍人が駆けつけてきて、私は助かった。私の顔色は

紙のように真っ白だったそうだ。

牡丹江駅の引き込み線で、二段仕切りの有蓋貨車に乗せられ、帰国と称してシベリア鉄道で西進した。貨車の扉は外から針金で固定され、昼間でも薄暗く、列車の先頭と最後尾には見張台が設けられていた。

列車は夜間になると猛烈に走り、昼間は予告なしに随時停車していた。単調なレールの継ぎ目の音だけが耳に入り、なかなか寝付けなかった。そのうちに隙間から水面が見え、一昼夜近く続いたので車内は騒然となった。日本海ではないかという希望的観測と、西に進んでいるから北極海に出たのではないかという意見もあって対立したが、実際はバイカル湖だった。

十一月七日、ソ連革命記念日の夕方に、粉雪の舞うカストマロポという戸数十数戸とラーゲルだけの一寒村に、九百九十八人が送り込まれた。カストマロポは、シベリア鉄道本線上のタイシエツトから、建設中のバム鉄道を三十一キロメートル北上した小さな駅のある寒村である。

いよいよ本格的な捕虜生活のはじまりである。

ここには、数日前に先着した千人編成のS大隊がいたが、二百人収容の木造建物が四つと附属設備があるだけで、到底、我々の寝る場所はなく、全員が動員されて五十人ぐらい収容できる天幕舎を構築し、夜明けごろ完成した。幕舎は二重テントになっており、真ん中に小さいストーブが置かれて、暖をとることができた。水の問題も大変で、水汲みの作業が昼も夜もあり苦勞した。

ラーゲルに附属して、通称、自動車工場があった。木工場、タイヤ修理工場、鍛工場、旋盤工場、組立工場、仕上げ工場、それに発電所もあった。ここでは、古いソ連製トラックの修理と土砂運搬用に改造するのが主たる作業で、バム鉄道建設の支援基地であった。兵隊が二千人もいるといろいろな職業の人がいて、どんな仕事もできたのでラーゲル関係者は喜んでいた。十二月の初めのころになると、アメリカからの援助物資スチュドベーカーの新車の部品が送られて、組み立てを開始した。この工場でも十数台を、奥地のバム鉄道建設現場に送り出した。結果的には、バム鉄道建

設には少なくとも日米の協力があつたことになる。

昭和二十一年の一月一日には、我々は全員整列し大隊長の号令で、東方遙拝と君が代の斉唱があつた。丸腰ではあつたが、軍隊の階級章をつけ軍隊の秩序は保たれていた。

父や母はどうしているだろうか、手紙も出せないことが一番つらいことだった。

三月ごろから、小グループ、大グループの転属が相次いだ。カストマールロボの四十ラーゲルも約五百人となり、日大尉が新しく大隊長となった。

捕虜通訳は、何でもしなければならなかつた。日本の軍医が扱つた村の住人の出産にも立ち会い、生命の誕生という崇高な瞬間に感激した。家畜のお産にも立ち会つた。

終戦以来、夢にまでみた『岩波露和辞典』を、ロシア人通訳が持つていた。昼はその通訳が使うので夜の間だけ借りることにした。自動車工場は三交代の二十四時間作業のため、終夜電気がついていたので学院時代を思い出して、むさぼるように一頁ずつ読み、全部

を読み通すことができた。前置詞を全部ちり紙に書き写した。辞書を読み通したという自信だけできた。

昭和二十二年の初めから、内務人民委員部（法務官）の私に対する尋問が、日を追つて厳しくなつた。

スパイ容疑である。クレムリンの執務時間は真夜中のうわさがあつたが、それに合わせるように就寝時間ごろになると、私を取調べ室に呼び出した。「どこでロシア語を習つたか？」「何の目的か？」「学校の一年だけでは、そんなに上手になるはずがない」「何回ソ連領に侵入したか？」「お前の仲間の名前を書け！」などと言われた。帰国を餌に精神的なゆさぶりをかけてきたが、無い袖は振れない。断固として受け付けずに自説を通した。毎回、数時間の尋問に耐えぬき、早朝のラーゲルに戻つた。自説を貫き通したことが、昭和二十五年まで抑留された因になつたのかもしれない。

昭和二十二年六月中旬に、カストマールロボのラーゲルが閉鎖され、日大隊長指揮の約百人はタイシエツトを経由して、チェレンホーボ郊外に移動した。アンガラ河を下つてバム鉄道建設の中心地ブラーツクに行く

船便を待つためだった。なかなか乗船命令がなく、鉄条網も塀もない草地に野営していた。この時期は、シベリアで一番美しい季節であり、気分的にも解放された夏だった。

このころになって私は、このまま捕虜通訳を続けていると帰国できないかもしれないと思い、気心の知れた仲間に通訳廃業を宣告した。しかし、タイシエットの新しいラーゲルに入ってみると、現実には意思の疎通を欠いて捕虜側が無理を強いられるのを見ると、黙っていられなくなり通訳復活となったが、帰国を断念したわけではなかった。

このラーゲルは、鉄道の路盤造成と枕木製材が主要な作業だったが、作業の性質上事故が多発した。病弱者、栄養失調者は病院に送られるので、ラーゲル内の死者は出なくなっていたが、事故死は悲惨で書くこともつらい。

このころから『捕虜通信』の発信が許可となったが、カタカナで通信文を書くようにとの指示で戸惑った。捕虜の情報を集める謀略であるとか、書いてもど

うせ届かないとか、諸説が飛び交った。

昭和二十三年三月ごろから帰国命令が始まった。第一次は、収容人員約四百七十人中、たった七十人である。この人選は日本人民主グループに任されたが、最終決定はソ連法務官であった。優秀作業員を基準の目安とすると、二十歳代前半の若い人になり、三十歳後半の年配者は対象から外される。体力の衰えた人こそ帰国させるべきであるのと思うが、ソ連側はどうして収容所単位で帰国させなかったのか今でも納得できない。以後、二次、三次と帰国命令があった。

残されれば生死に関することなので、人選の結果の明暗は天地の格差があった。そのうちに、今までいた四十八ラーゲルも閉鎖されて八ラーゲルに移った。昭和二十四年六月にはそのラーゲル全員に帰国命令がきた。しかし今回も法務官の指示で五十人が残され、私も残された。ラーゲル内は、火が消えたように急に寂しくなった。もしかしたら戦犯に指名され、帰れなくなるのではないかと不安が初めて頭をよぎった。

七月になって五十人の残留者のうち十三人が応調者

(思想上からのソ連の取り調べ該当者)として残され
タイシエットに送られた。一步一步戦犯と呼ばれるグ
ループに近づいて行くようだった。考えてみると哈爾
浜学院が狙われていたようだ。それから二、三のラー
ゲルに送り込まれて、十二月三十一日にナホトカに着
いた。

もう何度も何度もだまされていたので、帰国と聞い
ても信じられず、またサハリン(樺太)か沿海州のラ
ーゲルに送られるのかと、成り行きまかせの心境だっ
た。ナホトカでは、シベリア最終仕上げの労働歌と自
己批判が渦巻いているようであった。

そんなときに、突然に四十度以上の高熱が四、五日
続いた。ソ連では、発熱はもうそれだけで完全な病人
である。熱が下がらないようにと、体温計をなでた
り、さすったりした。

ナホトカでの民主運動総括の騒ぎも知らず、幸運に
も病院船「興安丸」に乗せられた。デッキからシベリ
アを見たとき、ただ涙が止めどもなく流れてきた。嬉
しさと悲しさとも惜別とも表現の方法が無い。赤旗

組でも日の丸組でもなく、ただ通訳として己に恥じる
ことなく一生懸命に働んだという、自己満足であった
のかもしれない。白衣の看護婦さんの「ご苦労様でし
た」という言葉に、初めて日本に帰れるのかなと思っ
た。五年振りに見る日本人女性が、輝くばかりに美し
かった。

昭和二十五年一月二十三日、舞鶴に到着した。長い
シベリアでの抑留の末の大陸との別れになったが、貴
重な勉強をしたものである。その日、私は二十四歳と
九カ月だった。検疫とシベリア事情の聴取で、東舞鶴
平寮に一週間とめられ、一月二十九日、横浜駅ホーム
に降りた。

ハ爾濱学院に入学のため横浜を出立してから二、一
二八日目であった。

歴史に「もしも」は無いと言われるが、あえて「も
しも」ということが言えれば、「もしも、ハ爾濱学院
が存在していなかったら、そしてハ爾濱学院生がロシ
ア語を学んでいなかったならば、敗戦後の満州のあの
混乱と、シベリアの捕虜生活において、日本人の犠牲

者はもっともっと増えていたに違いない」と自負し確信している。哈爾浜学院は、日本及び日本人のために大変役立つたということを、声を大にして誇ることができる。

昭和二十年六月二十三日沖繩の陥落、八月の広島、長崎への原爆投下により多くの犠牲者が出たこと、そして終戦記念日などは毎年新聞、テレビ等で報道されるのに、日ソ中立条約を一方的に破棄して、八月九日未明、ソ連軍が満州、樺太、千島に侵攻し、一部地区においては停戦協定成立後まで攻撃を継続していたことなどを報道するマスコミは皆無である。日本軍の戦死者、傷病者、そしてソ連抑留者の死者、在留邦人の犠牲者が数多く出たのだ。その結果、残留婦人、残留孤児の悲劇も起きてきたのである。なぜ報道しないのか。このことを不思議に思うのは、私一人ではないだろう。

戦争と父と私

神奈川県 山 県 恵美子

私は旧満州国の奉天市で生まれ、その十年後には、祖国が破れるという、悲しくも厳しい現実に出会いました。終戦前後の経過は子供でしたので、日時や場所、地名などは詳細には書けません。強烈に焼きついている記憶などを頼りにペンを進めることにいたします。

私の父、金子春治は奉天市の中央郵便局に勤務しておりました。れんが造りの二重窓の官舎に、両親、私、弟、妹の五人家族で住んでおりました。官舎の住所は、奉天市霞町十三番地だったと思います。

なぜ、父が祖国を離れて満州に渡ったのかは、父に直接聞く機会がなく、戦後に伯父に話してもらいました。父は、岐阜県高山市で金子家の長男として生まれ、親の手助けをしながら小作農に従事していました。